佐方さんにお世話になって

早川征一郎

佐方信一さんは、私と同じ一九三八（昭和一三）年生まれで、私と同年であると記憶している。佐方さんと私との交友関係を振り返るとき、大原社会問題研究所、（労働）旬報社を抜きにしては語れない。同時に、大原社研側の私からすれば、出版社側の佐方さんに終始お世話になってきたという印象が残っている。表題はそのことを意味しているが、以下、いくつかの事柄を記して、「お世話になった」佐方さんへの感謝と追悼の言葉としたい。

出会いと『日本労働年鑑』

佐方さんと私が初めて出会ったのは、一九七二年七月末、小平市上水新町の中林賢二郎先生の自宅であった。七月末の暑い折、初対面の挨拶を交わしたことを覚えている。

一九七二年四月、東大社研助手を経て、大原社研専任研究員として採用された私の仕事は、まず『日本労働年鑑』（第四三集、一九七二年版）を分担執筆することであり、翌年（第四四集、一九七三年版）からは中林先生から引き継いで、執筆と編集を担当することになった。佐方さんは当時、労働旬報社で『日本労働年鑑』の編集業務を担っていた。

以後、半世紀近い交友関係が続くことになるが、その中核が『日本労働年鑑』の編集・出版であった。とりわけ手書きの原稿の頃であった七〇～八〇年代、佐方さんは、私以上に丹念に原稿を読み、統計上の整合性を吟味し、原稿の問題点を指摘し、私に「解決」を求めた。大原社研編で『日本労働年鑑』が刊行されることから当然であるとはいえ、自らは決して原稿に手を加えず、初校、再校、三校、そして刊行に至るまで、あくまで「黒衣」に徹していたのが佐方さんであった。

出版人としての佐方さんのそうした基本姿勢は、あるいは佐方さんの「生き方」そのものであったのではないかと密かに推測しているが、その点はこの追悼集のほかの方々の回想文を待つしかない。

佐方さんとの共同の仕事

『日本労働年鑑』以外にも、とくに組合史でいくつかの共同作業がある。そのうち、私が執筆・編纂側の責任者となっているものとして、阪急電鉄労組編『阪急電鉄労働組合三十年史』（一九七六年）、全国金属史編纂委員会編『全国金属三十年史』（一九七七年）、法政大学教職員組合四〇年史編纂委員会編『全法政四〇年の歩み』（一九九四年）などがある。そのほか私が執筆したものとして、川﨑忠文さん（元労働旬報社）との分担執筆による大阪府職員労働組合編『大阪府職労三五年史』（一九八二年）や、川﨑さん他による国鉄労働組合編『国鉄労働組合五〇年史』（一九九六年）がある。

それらの総決算ともいえる仕事が、定年退職前の数年間，法政大学大原社研編『日本労働運動資料集成』（全一三巻＋別巻、二〇〇五～〇七年、旬報社刊）であった。その出版社側の担当者も佐方さんであった。

もっとも組合史の執筆・編纂では、私自身はその本の「著者」ではないので、これまで自分の研究業績だと名乗ったことはない。ただ、私の社会政策＝労働問題研究者としての人間形成過程において不可欠な部分であるのは確かである。

それ故、ここで確認できることは、そうした組合史執筆・編纂のメーンな部分において、私自身はひとかたならず佐方さんのお世話になってきたことである。この追悼文を書きながら、改めて私にとっての佐方さんの存在の大きさを再確認しているしだいである。組合史執筆・編纂で、ほとんど知られていない話を一つ付け加えておこう。私の亡き妻・カツ子が書記をしていた全国電気通信共済会労働組合の編纂によるものとして、『電済労三〇年史』（一九八四年、労働旬報社刊）がある。この編纂過程で、初めに私が組合史編纂の在り方について組合の担当者にアドバイスしているが、執筆は川﨑さん、出版社側の担当は佐方さんであった。その三人とも、もうあの世へ旅立ってしまった。

青梅・御岳の「紅葉」とかれらとの「歓談」

佐方さん、川﨑さんらとの会合として忘れられないのは、毎年一一月の紅葉の頃、御岳の「ままごと屋」で清酒・澤之井を酌み交わし、談笑したことである。最初は二〇〇七年か翌年の一一月であった。それに、芹澤寿良さん（元鉄鋼労連書記、高知短大名誉教授）が加わり四人となった。二〇〇九年一二月、川﨑さんが急逝し、やがて大原社研の五十嵐仁・明子夫妻が加わった。四～五年続いた集まりだったが、「松戸から四時間近くかかる」とぼやきながら出席していた佐方さんを想い出す。いまは私にとって懐かしい一コマである。謹んで、ご冥福をお祈りすることにしよう。

（法政大学名誉教授・大原社会問題研究所名誉研究員）